研究所所員の近著より

おやさと研究所主任
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

『井筒俊彦の東洋哲学』澤井義次・鎌田繁編、慶応義塾大学出版会、2018 年

澤井・鎌田両氏の共編著による『井筒俊彦の東洋哲学』は、井筒俊彦が英語で発表した研究やエラノス会議での講演に注目し、彼が構想しようとした「東洋哲学」について、13 人の宗教研究者の論文が掲載されている。「はじめに」によれば、井筒は、東西の諸言語に通じ、イスラームばかりではなく、ユダヤ、インド、仏教、儒家・老荘思想、日本思想や現代哲学に至るまで、広範囲な哲学思想を独自の意味論的手法によって、数多くの東洋思想のテクストを読み解いたという。本書には、それぞれの研究者が自らの専門領域から批判的に探求した比較宗教学的な論考が収録されている。第Ⅰ部では、ユダヤ思想、キリスト教思想、イスラーム思想に焦点をあて、井筒の「東洋哲学」のもつ問題性を検討。第Ⅱ部では、中国思想、日本思想の観点から、井筒「東洋哲学」の特質を明らかにしようとし、第Ⅲ部では、「東洋哲学」の今後の展開可能性を示唆するものである。目次は以下の通り。なお巻末に、井筒俊彦研究文献一覧が収録されている。

第Ⅰ部 セム系宗教思想と「東洋哲学」―イスラーム、ユダヤ教、キリスト教
　第１章 「東洋哲学」とイスラーム研究：鎌田繁
　第２章 井筒俊彦とカトリックの霊性：若松栄輔
　第３章 近代ユダヤ教正統主義におけるコスモスとアンチコスモス：市川裕
　第４章「神秘哲学」から「東洋哲学」へ：島田勝巳
　第５章 イスマーイール・シーア派思想と井筒俊彦：野本晋
第Ⅱ部 形而上学と東洋思想
　第６章 形而上学的体験の極所―「精神的東洋」とは何か：氣多雅子
　第７章 井筒俊彦と華厳の世界―東洋哲学樹立に向けて：安藤令二
　第８章 井筒俊彦における禅解釈とその枠組み：金子奈央
　第９章 井筒俊彦が開顕する仏教思想―比較宗教思想的地平から如来蔵思想をみる：下田正弘
第Ⅲ部 未来へ向けて―「東洋思想」の展開
　第 10 章 東洋思想の共時的構造化へ―エラノス会議と「精神的東洋」：澤井義次
　第 11 章 井筒「東洋哲学」の現代的意義―兼ねて郭店『老子』と『太一生水』を論ず：池澤優
　第 12 章 東洋における言語の形而上学：ロペス・パソス・フアン・ホセ
　第 13 章 根源的現象から意味論へ―思想を生む知性の仕組みを辿る：小野純一
井筒俊彦研究文献一覧：長岡徹郎作成

『現代における宗教批判の克服学：人間と宗教についての思想的探究』金子昭、萌書房、2018 年

金子昭氏による『現代における宗教批判の克服学：人間と宗教についての思想的探究』は、2009 年から 2011 年にかけて『グローカル天理』に連載したものをベースに大幅に再編され、さらに他所で発表された論究なども加筆修正の上で収録されて、人間と宗教についての問題を問い、より深めていく思想探究的論考となっている。本編は平易な表現で叙述されており、研究者だけでなく、宗教や宗教研究に関心のある一般の人にも読みやすいものとなっている。

著者は「おわりに」で、ナチスドイツ時代の３人の神学者カール・バルト、ルドルフ・ブルトマン、ディートリヒ・ボンヘッファーに言及し、ドイツにとどまり苦難の時代を同朋とともに過ごしつつ、ユダヤ人学者に親身であったブルトマンの生き方に心密かに共鳴し、次のように述べる。「ナチス時代のような過酷な環境ではないにしても、どのような時代状況の中であれ、自己の良心と外部の状況との間の葛藤や対立はつきまとう。そんな時、下手な手出しをしない代わりに、あえてその場に踏みとどまって自己のベストを尽くすブルトマンのような姿勢こそ、一見目立たないが、神学者としての堅実な良心の発露を見出すことができるのではないだろうか。」「誰もがそれぞれに不自由で不本意な環境の中で生きている。自分もまた、同時代人としてその不自由さ・不本意さを受け止め、人々と共に生きる中から自分の信じる道を進んでいくことは、学者としての良心が要求される一つの試金石なのである。本書を著した私の思いもそこにある。」

目次は以下の通り。
　第１章　幸福を求める人間と宗教の姿勢
　第２章　宗教と信仰の相違という問題
　第３章　個人的信仰と宗教的共同体、そして霊的共同体
　第４章　真理を求めるのは智慧か愚かさか
　第５章　宗教の救済力はどこから来るか
　第６章　無縁社会と宗教的“縁”の形成
　第７章　宗教の“世直し力”を再考する
　第８章　宗教的生命倫理の共有概念「いのち」
　第９章　巡礼の物語としての人生
　第 10 章 宗教的偉人とは何か―シュヴァイツァーをめぐる三題
　第 11 章 宗教の信頼性は自己批判できる透明性にある
　第 12 章「自信教人信」―信仰者と宗教者の間
　第 13 章 宗教教団論―その再生は可能か
　おわりに 三人の神学者の生きざまから